

Title	元禄-享保期町人倫理の考察：西鶴以降の浮世草子を中心として
Sub Title	A study of the ethics of "Chonins" in Genroku and Kyoho periods with special reference to "Ukiyozoshi" written since Saikaku
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1974
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.67, No.6 (1974. 6) ,p.452(106)- 472(126)
JaLC DOI	10.14991/001.19740601-0106
Abstract	
Notes	小池基之教授退任記念特集号 論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19740601-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

元禄一享保期町人倫理の考察*

—西鶴以降の浮世草子を中心として—

島 崎 隆 夫

1.

天和2年(1682)10月「好色一代男」の板行によって西鶴の写実主義的な庶民文学は多くの愛好者の支持をえつつその地位を確立し、「浮世草子」の時代がここに始まった。西鶴はいわゆる好色ものより筆を執り、やがて武家ものへと、その作風を二転、さらに三転しつつ「日本永代蔵」(元禄元年・1688)、「世間胸算用」(元禄5年・1692)、「西鶴織留」(西鶴死後団水により元禄7年・1694に刊行)等をふくむいわゆる「町人もの」を世に出したのであるが、すでに西鶴の文壇における地位は好色ものを中心として、浮世草子の世界において全くゆるぎなきものであって、西鶴の在世中は勿論のこと、没後においても、西鶴の追随者や模倣者を多数輩出した。総体的にこれを見るならば、浮世草子は依然として好色本が中心であったが、町人の経済生活や経済活動を対象とした町人もの系統にぞくする草子や、町人に覚醒を求めるいちじるしく教訓性をもちこんだ草子や、やがて八文字屋本として町人間に多くの読者を獲得した草子がおびただしく板行されていた。浮世草子時代の終りをかざる八文字屋は、とくに気質(かたぎ)を手がけることによって成功し、いわゆる気質物の流行をもたらした。気質物とは庶民(町人)の子息、娘、親仁、母親、妾、姑、旦那、仲人、貞女、夫婦、女房等の気質の類型化、旗本、茶人、宗匠、医者、出家、学者、役者、傾城等の気質、また町人中の長者、大尽、銀持、手代等の気質、さらに化物気質に至るまで、気質を極端に類型化した草子を行い、それは誇張と諧謔をふくみ、奇をてらった題材で読者にうけ、もてはやされるに至ったが、文学作品としては必ずしも高い評価をうけずにおわったものである。この八文字屋本が完全に姿を消したのは明和4年(1767)であったが、その期を待たずして実質的には享保終期までに浮世草子の時代は終り、わずかに人々の間に「気質物」が読まれていたのである。この頃にはすでに文芸の中

* この小論は、西鶴以降の浮世草子中の都の錦「沖津白波」と北条団水「日本新永代蔵」を中心として、元禄一享保期の町人倫理を考察するものである。江島其礎について展開しえなかつたが、他日それらをふくめて再び検討を加える機会を持ちたいと考えている。

心地は、京・大阪より江戸に移っており、「読本」の世界が展開しはじめていた。西鶴以降における浮世草子は西鶴の時代に比して、より多くの庶民に、しかもより下層の多数の庶民に愛好されるに至ったことから、浮世草子の作者は書店経営の成功をもかんがえ、より多く売らんがために、すすんで多数庶民の性向におもねる仕方草子の筆を執ったことも事実であり、それ故出来上がった草子が文学的価値をいちじるしく低下させる結果となったのもやむをえない。ただ当時の町人らがこれら浮世草子を読むことを娯楽の対象としたこと、また町人らがこの草子に日常の生活、生業をいとなむ場合に参考に資し、頼るべき指針・教訓を求めたこと、あるいは理想的人物像をえがき求めて、草子の叙述に夢中になったことも事実であった。おそらく一つの説教よりも、当時の人々の考え方や生き方を形成するのに、草子をはるかに力強く作用したと考えられる。

さてこの小論において、わたくしは元禄・享保期の町人の経済倫理を考察することを目標としているが、その素材として西鶴以降板行され人々に広く読まれた浮世草子の若干を使用した。元禄・享保期の町人の経済倫理を検討した諸研究は今日まで数多く発表されているが、経済倫理をもふくめて町人の思想についての研究は、主として西鶴、近松の作品を通して行なわれている。これは西鶴、近松がこの時代の文化を代表する最もすぐれた作者であり、その作品が文学作品として最高の地位を占めるものであり、作品に登場する町人がその時代を典型的にあらわす人々であったところから、これらを対象とした研究が進められたのは所期の目的に合致するもので、まことに当をえたものと言わざるをえない。わたくしは西鶴や近松の作品を念頭におきながら、上に述べたごとく西鶴以降の浮世草子の若干を対象としてこの小論をすすみたい。この時期の町人の経済倫理を考察するにあたり、西鶴や近松の作品を念頭におくが、さらに西川如見の「町人袋」や、享保期に入り活躍する石田梅岩の心学思想を検討せねばならないであろう。いまこれらに直接ふれないうで、西鶴以降板行された浮世草子の若干を対象とし検討せんとするのは、これら浮世草子を通しての研究が比較的少ないのではないかと考えたからに外ならない。

元禄・享保期の社会経済的、政治的、思想史的乃至文化的特色についていま詳述する意図はないが、この小論との関連において若干の指摘を行っておきたい。天和、貞享、元禄初年に活躍していた西鶴の死去(元禄6年・1693)、芭蕉の死去(元禄7年・1694)をもって一期を画しはじまった元禄は、以後宝永、正徳、享保20年(1735)とつづき、約40年間のいわゆる「元禄・享保期」となる。政治史的には五代綱吉(在位1680~1709)の後半期より、六代家宣(在位1709~1719)、七代家継(在位1713~1716)および八代吉宗(在位1716~1745)に至る四代にわたる將軍治政の時期である。とくに家宣、家継二代につかえた新井白石のいわゆる正徳の治を中心として前後にわたり、綱吉の期には元禄8年(1695)の元禄の貨幣改鋳の大事業があり、白石の政治のあとには吉宗の享保の改革がつづいている。思想家・経世家の活躍のあとをみると、山鹿素行はすでに没し(貞享2年・1685)、熊沢蕃山は幕府の忌諱にふれ古河に禁錮され(貞享4年・1687)、すでに蕃山はその活動期を終え元禄4年

(1691)に没している。伊藤仁斉は堀川学派の指導者として盛名をとどろかしていたが、宝永2年(1705)に没し、吉宗の治政下でその学風が一世を風靡したと称せられた荻生徂徠も享保12年(1728)に没している。徂徠の死よりやや早く享保9年(1724)には「百姓袋」「町人袋」の著者西川如見が没した。西鶴、芭蕉とともに元禄期庶民文化の雄であった近松がその生涯をとじたのは享保9年(1724)であり、新井白石も享保10年(1725)に没している。かくのごとく、徳川の初期より中期にかけて思想界、文学界で活躍した多くの人々は、ほぼ享保の終り頃までに死没し、次の世代の人々の活躍がはじまろうとしていた。最後に一つ指摘しておきたいのは、石田梅岩(貞享2年~延享元年、1685~1744)が享保14年(1729)に年45にして、居宅を京都東屋町通御池上る東側に構え、はじめてその講義を開始したことである。梅岩の著「都鄙問答」が刊行されたのは元文4年(1739)であった。

この小論は、元禄・享保期における町人倫理を検討することを対象とするものであるが、それはまた次のごとき展望ともかかわりあいをもっている。梅岩は享保14年に幼少よりの徒弟奉公、番頭としての勤務、長期にわたる求道生活のすえ、多年にわたる人生の疑問を解き、開悟して、京都の庶民に対し講義を開始するに至ったが、この頃は、小論が素材として利用せんとする浮世草子が八文字屋本として板行されていた終期にあたるのである。心学の創始者である梅岩の思想形成の過程と、梅岩の思想の真髓は、種々の角度より検討することが可能であるが、「儒学わけても朱子学を中核とし、その左右に禅や念仏の教理と神道の思想をば併せて成ったもの⁽⁹⁾」であり、これも「ただ神仏三教を折衷あるいは合採して成ったことを意味するものではない⁽¹⁰⁾」と指摘されるものである。しかも梅岩は「人の人たる道を、ただ経書の上で知るのみではなく、これをわが身にとって考え、わが心に自証しようとしたところ」に、「どこまでも自己の体験を重んじ、その生活の反省の上に主体的に道を求めた⁽¹¹⁾」ことによって開悟し、そこに梅岩の心学の特色が指摘されている。かかる指摘より考えれば、梅岩の心学思想の形成は儒仏神の教養の混合と、主体的な経験と思索による開悟ということとなる。いま具体的に、直接的に、個々の思想について十二分の準備を欠くのであるが、梅岩の思想形成の上に、儒仏神の教説の一部をも取り入れて、当時の町人の生き方にある種の影響を与えつつあった西鶴以来多くの人々に愛読されてきた浮世草子の存在が、とくに浮世草子中のいわゆる町人ものや、八文字屋の気質もの存在を考慮することが必要であると思われる。とくに、八文字屋本は京都を中心として板行がつけられ、町家で働く下層の徒弟、番頭、主人らはおそらく浮世草子に興味をおぼえ、読みふけたであろうことが想像される。ただ浮世草子が当時として高価であったところから⁽¹²⁾、下層の町人には教養、読書力の低さから無理であるとの指摘もできるが、当時の人々が好色の世界をはじめとして、町人もの世界に目を注ぎ、町人の世界にみられる致富のための活動、成功談や失敗談に多くの興味を持ったであろうと思われる。そしてこれらの草子に示された、低俗ではあったが、「教訓」を身近かなものとして関心を寄せ、実行せんと燃える町人があらわれてきたことも想像できる。とくに時代が元禄の終りより享保期に及ぶと、西鶴の在世に

比して、町人にとってははるかにきびしい時世であり、簡単に巨富を獲得する機会に乏しく、それにもまして一朝にして産を失う危険がましてきたのが現実の世相であってみれば、町人のうち心ある者は、一層日常の生活や営業について処世訓を求めることに切実であった。ただこれら浮世草子には後に検討したいと考えているが、梅岩が心学の主張にふくませた人生や商業行為等についての根本的な問いを問うていない点は注意しておきたい。すなわち、町人の階級的自覚、階級的要求、あるいは「町人道」の積極的主張、商業行為、利潤の積極的肯定とその理論づけ等は浮世草子には、そのままの形では見出しえない。これは浮世草子の性格そのものよりくるものである。これらの根本的問いを欠除していたとしても、浮世草子にもられていた諸思想は、町人にとってまことに切実なものであったことは否定できない。彼等はこれらの草子を通して、みずからの生き方を正し、生き方に安心をし、また発奮し、他人の行動から学び自分の心のあり方に警戒をなしつつ現世に処して行ったのである。かくて浮世草子は、多くの人々に、梅岩をもふくめて、影響を与えたことが予想される。さらに重要なことは、梅岩が京都に講席をもうけて説教をはじめた時、その説教を理解し、その説教に共鳴しうる心の状態に、当時の町人を置くに至った点を考え、また、心学の諸著作を読んで理解し、その教訓を実践にかりたてて行った面を考える時、浮世草子の存在はけっして軽視すべきでないと考える。

2.

「筆を好色にはじめた西鶴は、当然ここに至らねばならない。好色は絆に窮り、絆は富を得て全し、絆を人生の理想とする町人は、まづ富を求めねばならなかった⁽¹³⁾」のである。競争者の多い激しい商売の世界において、富を獲得することはまことにむずかしい。親のゆずりをうけぬ者にとって、競争者に勝ち巨富を獲得するためには、偶然の好機会にめぐまれる必要があるが、これは誰にも約束されたことではない。そこで各個人一人一人は、好機をすばやく見抜くことをもふくめて「知恵・才覚」を十分働かせねばならないし、家業、身近な職業に、一心不乱に精を出し、儉約につとめねばならず、これらが致富への絶対の条件となった。西鶴の町人もの、日本永代蔵は副題の示めすごとく、寛永年間の「長者教」の系譜につながるものであり、それを模して致富に成功した、また逆に財産を灰燼に帰した人々の物語を述べているのであるが、それらをきわめて明白な筆致で叙述しているために、多くの人々に多大の感銘を与える結果となった。そこには人間に共通した物欲に対し、成功も失敗もともに結局人間の真実にかかわりあうことが強調されている。西鶴の筆は時として誇張され、読む者に滑稽を感じさせることもけっして少なくない。とくに西鶴は富を願うて獲得できず貧困にあえぐ人々のかなしい世渡りの実相についても目を向け、貧しい人々は貧しさに処する知恵を働かせながら、日常の生活にたえているいじらしい姿をもえがいている。世には貧か

ら富に移るものがあり、富から貧におつるものがあり、どうしても貧からのがられない人々がうごめいている。西鶴はこれらを世相としてながめ、その真をうつして妙をえ、人間性情の深さに触れたのである。

西鶴はすでに述べたごとく、貞享末年には好色の筆をたち、元禄に入る頃には町人ものに転じていたが、貞享・元禄の時代の小説界は西鶴の好色一代男の成功に刺激されて、依然として好色本が一世を風靡していた。西鶴以後の作者は西鶴の死後、時がたつにつれて無用の趣向や奇をてらって読者におもねる風を多く持つようになった。依然として好色本がその中心であったとはいえ、好色ものと町人ものとをあわせて一本にした趣向の草子も現れてきた。

浮世草子はすでにみたごとく、時代相を写實的に叙述し、そこに作者の意図をもとるところに成立したのであるが、その対象が好色以外の世相の描写に移るのは当然であって、このことは西鶴の作風の変転が如実に物語っている。たしかに西鶴の町人ものは、現実の世相を写し出して町人が致富のため、時として義理も、人情も、道徳も、捨て去って行動した町人のくい手腕を書いている。しかし西鶴は町人らしからぬ仕方で富を獲得した町人についてはきびしく、たちまち以前より悪しく没落する運命を設定し、「すかぬ男」としてきびしく糾弾することを忘れていない。もし致富のために取られた悪辣な手腕をいさしく徹底すれば、あるいは趣味本意にこれを叙述すれば、それは「詐欺」に変じ、さらにそれに暴力が加味されれば「強盗」の行為ともなる世の中である。まして時代はすでに移り、一朝にして巨富を獲得することもむずかしく、また金銀に糸目もつけずに散財する浮世狂いの可能な時は過ぎ、好色の世界でも世知がらい遊びが普通となっていた。かかる時世となったのであるから、町人の世界において、以前よりも悪辣な行為の盛行がみられ、町人は一層これに注意せねばならない。かかる時世を反映して、一層教訓性に富んだ草子があらわれてくるのも当然であった。西鶴の浮世草子の出自が近世初期の仮名草子にあり、仮名草子もっていた教訓的性格をもともとうけついでいたのであるから、日本永代蔵が大福新長者教と副題がつけられていたことからわかるように、長者教が持っていた教訓性を、はるかに高い水準において継承している。人々は町人ものを読むことによって、そこにもらわれている教訓性にふれて、日常の生活や営業に処する勇氣とよるこびと、そして失敗を避けるための注意を喚起されたことであろう。その教訓性がいちじるしく誇張されて語られるとき、人々は滑稽を感じたであろう。けれども、西鶴の作品は西鶴以外の作者が一層極端に強調した教訓性に比すれば、はるかに自然であって、人の情に近いものといえるであろう。

さて、かかる意味で、教訓性を強く意識して書かれた浮世草子の一つに、元禄15年刊行にかかる都の錦作の「沖津しら波」(大本5冊)がある。本書は盗賊談をふくみ、かたりの手段とそれへの警戒を伝えることで、人々に世を渡るに必要な注意をうながすものである。筆者都の錦は、この間の事情を次のように書いている。「……かの事林広記を披てみるに飽煖(ゆたか)なれば淫欲を生じ飢

寒(まずし)なれば善心⁽¹⁷⁾を発すといへる言を考へれば、今わが身にひしと思ひ^{アツク}あゝ慮外^{ウツク}ながら。むかしは紋薄布の蚊帳に匂の玉を下げ、銀の茶碗で砂糖水をのみ、小判百両より鳥目壹貫を大切に思ふ心から財欲はみぢんもなけれど、色欲はもつはら甚しく、色好みのあまり紫が筆のかがやくふらつば、菱川が書たる小町のうつし絵に似たる女もがなと夜ひる肺肝をください、人のそしりのよしあしも難波なる西鶴法師が口にかかり、好色一代男の名をや流さんと思ふばかりなりしが、日本の神もって今はその過をあらため至善にとどまりて道徳を積ゆへに、少もそつとも凶邪を畏れず本より貧賤に居て飢寒の憂なければ、……」は「丹波の庄屋——古田孫兵衛が事書物やと問答する事——」(V-1)の中で都の錦と本屋との問答の言葉である。本書の白波とは盗賊の義であり、本書は盗賊に関する物語を集めたもので、好色にぬりつぶされた感のある当時の草子界に新奇をもち、読者に興味と教訓を与えた。都の錦は本書の序にて賊、押入、追振、舌三寸にて人をだます等「浮雲渡世」にみのけのよだつおどろきをおぼえるところから、「乱臣賊子の性悪」を知らせて目ざめさせようとして書き集めて五冊にしたと云う。いま本書の全内容を詳述することは必要でないが、そこに示されている教訓に注目しつつ、一二の物語を見ることとしよう。まず全体として本書にあつめられた話をみると、気づくことは、酒顛童子の異聞(I-3)悪名高き熊坂長伴の物語(II-1,2)石川五右衛門の物語(IV-2)や伊勢物語の一条を根拠に書いたという古田孫兵衛・古田九助の物語(V-1,2)等は昔より人々周知の物語を書きかえ、その上に教訓を加えたものである。例えば「あばらやの女」(I-1)にぬすみに入った盗賊が人の話におじけついで一度はぬすみをやめるが「それにもこりず大太郎盗の数かさなりて後にとらへられ、罪におこなはれけりとなり」(I-1)とむすび、「されば君子は安に居て危を忘れず、小人は危に居て安きがごとくするゆへに、かならずひよんな死をする、つつしみたまへ世の中の人」(I-1)と加えている。また「商人の一念」(I-2)には盗人の頭である保輔が自家におとし穴をつくり、家に商人を呼びつけてはだまして穴におとし入れて殺し、財貨をうばった。この悪人の悪だくみに気づいた一人の絹商人により悪人は自ら掘ったおとし穴につきおとされる話。教訓として「古語にいほく人を欺けば必ず自ら其心を欺く、其心を欺けば自ら其天を欺く、心ソレ欺クベケンヤ。此心を欺とは偽りだますなり。人をいつはりだますと思へどもみづから我が心をわれとだますなり。わが心をわれとだませばすなわち天道をだますなり、心は天理のそなはりある所なればいつはりだますべからず、たとへば人を偽りだますともわが心においてはぢざらんや、あゝおそるべし天の責、人心一念を生れば天地ことごとく皆知る、善悪若し報無くんば乾坤必ず私有りとは邵康節の金言なりとぞ」(I-2)をあげている。「大江山のさかづき」(I-3)では「およそ善を積みば善に逢ひ、悪を積みば悪に逢う、仔細に思量すれば天地は錯らず、善悪到头終に報有り、高飛遠走てもかくれがたきなるをや」(I-3)と。これらの教訓には儒教の教義の理解とその応用の一端がうかがわれ、また次の言葉から当時の庶民の信仰の一端を知ることができ、「よしやそれとも前世の因果、仏神にさへすてられずは、……」庶民の行動を支えるものとし

て天・仏・神への信仰がある。教義そのものをとくに問題とするよりは、莫として善行に味方し悪行は必ず報いをうけるものとしての天、仏、神が存在し、それに希望を托して生きている。これは「日本永代蔵」や後述する「日本新永代蔵」に登場してくる庶民の信仰と同一のものである。かたりの話として「京都の辰巳」(IV-4)が面白い。古道具を商う主人のところ、田舎ものが家宝として一休和尚の書画があるといってきた、それを買ってくれという。主人は15両でそれを買うつもりでいた。そのあと一人の武士が現れて何か珍しいものはないかと主人に聞いたので、主人は例の一休の書画を示し、それを高く売らんと取引をする。武士は75両から90両の高値をつけて買うと約束して小判2両の内金を渡し、翌日来るからと云いのこして去った。つづいてさる田舎ものが例の一品を持って来て15両を受取って去る。主人は良い取引ができたものと心秘かによるこび、買手の武士が来るのを待っていたが、いつまで待ってもついに来ず、また掛物は全くの似せもので三文の値打もないものであった。田舎ものも侍も同じ穴の狐、賊の骨長であって、主人はまんまとかたられ、だまされて、金を失ってしまった。「さても75両の徳すべしとて13両の損したる事も欲のふかきゆへにや、田舎もの、武士の2人ともに「語りの大名人」であったという。この様なかたりの物語など当時の町人は日常経験した出来事であったであろうから、興味をおぼえ、自ら注意をよびおこされたであろう。

沖津白波中に見出される教訓性には多分の誇張があり、術学性があったとしても、当時の庶民が同感しうるところのものをふくみ、また当時の庶民に教訓を教えこませる作用をもっていた。いよいよきびしくなる現実で、生きながらえんとする庶民が世渡りの術を学ばんと真剣である姿や、天や神や仏の信仰によりすがり、日常を生きんとする庶民の心がうかがえる。

3.

浮世草子の発展は好色ものを別にすれば、「沖津白波」「昼夜用心記」「儼偶用心記」のごとく、(これらは広義の町人ものの中にふくまれる)、いちじるしく教訓性の強い作品が読まれたとともに、本来の町人ものが板行されて人々に愛読されていた。いまその若干を列挙すれば、唯楽軒の「世界万宝立身大福帳」(元禄16年刊・7冊)月尋堂の「子孫大黒柱」(宝永6年刊・6冊)、北条団水の「日本新永代蔵——今世長者鑑——」(正徳3年)および江島其磧の「商人軍配団」(正徳2年・5巻)、其磧の「渡世商軍談」(正徳3年・5冊)等があり、さらに八文字屋本のいわゆる「気質もの」の中に町人ものが若干ふくまれている。「立身大福帳」は西鶴の作品を模倣したものであって、町人の致富、倒産等に関する物語をあつめて教訓を伝えるものであり、「子孫大黒柱」もほぼ同一の傾向のもので、貧しい商人がその家業に精を出さず、いたずらに一獲千金を夢みる愚をさとすために、分限者の致富・苦辛談を集めたもので、これまた教訓性の強いものといえる。ともに西鶴の日本永代蔵や

織留等の傾向をうけついでいたが、その文学性においてはるかに劣るものであったが、当時の町人の生き方に教訓を与え、町人の熱望にこたえるものであった。

北条団水の「日本新永代蔵——今世長者鑑——」は正徳3年の板行であって、本書名「日本新永代蔵」はいうまでもなく西鶴の「日本永代蔵」よりとったものであり、副題「今世長者鑑」は西鶴の日本永代蔵の副題「大福新長者教」あるいは「西鶴織留」の副題「本朝町人かぶみ」の別名を踏襲したものである。これをみても、西鶴の忠実なる後継者をもって任じていた団水は、西鶴がかつて叙述した町人の世界、「たくましい町人の蓄財意欲から生れたもので、才覚と勤勉と儉約からかちえた富豪の立志伝的性格を盛った」⁽²⁰⁾ものとして本書を著述した。西鶴はすでに述べたごとく、近世初期の「長者教」を継承して、その水準をはるかに凌駕し、新境地をつくり出し、わが国文学史上の傑作にまで到達したのであるが、本書は西鶴のあとをうけたが、文学作品としてはるかにおとるもので、これは西鶴と団水との力量の相違であるのはいうまでもないが、草子作家としての団水が商業主義とやや低俗な人々の求めに応じて筆をとったことに因があったであろう。本書のごとき町人ものが、当時の町人間で盛んにもてはやされ、町人の心を強く引付けるに至ったのは、町人にとって最も切実な金銭・浮世の問題を取り扱っていたからである。

「日本新永代蔵」は6巻より成っている。各巻5ヶの独立した小話を取めているから、すべてで30話である。各巻の目録の立て方や、図案など、西鶴の日本永代蔵の生きうつしてあり、紋付の暖簾の下に題名を記している。小話の内容や話しの運び方など西鶴の全くの模倣に近いものがあるし、さらに織留、世間胸算用、本朝二十不孝等によるところもあって、独創性の乏しいものになったといわざるをえない。「西鶴が日本永代蔵で心を尽したのは、富を致すための知恵才覚と勤儉の態度を伝えることであつた。その間おのづから人間性情の深いところに触れ、その余おのづから教訓の口吻となる」⁽²¹⁾のに比したとき、団水は人間の本質にせまることができず、教訓性のみがさらに度を加え、時として勧善懲悪性を露骨に示すものとなつたところもある。両者の具体的な対比はここで⁽²²⁾は省略するが、団水が小話の終りに長々と教訓を述べるのが多いのは、前述の沖津白波等の草子の性格と軌を一にしている。

本書が意図するところは、「ちかき世の町人家業を遊興にわすれ、金銀の重き宝を失ふ」(序)ことの無いように訓誡するところにある。そこで「あらたに長者の名」をえた物語をあつめて新永代蔵におさめたのが本書であるという。本書は全体が6巻30話より構成されているが、ここでは個々の物語の梗概を伝えることをやめて、本書を通じて次のごとき項目についての叙述を整理することによって、この時世の町人の生き方、倫理について考えてみようと思う。(1)元禄期に比して時世が大きく変りつつあることの認識、(2)金銭の大切なることと金銭の性質について、(3)商人の金銀獲得(致富)の努力は若い時になすべきことと、年老いてもつとむべきこと、(4)商人の理想の姿、(5)商人の処世のいましめ(1)日常生活の信条 (2)商業経営のための信条。

(1) 本書には随所に時世が大きく変わったことが書かれている。「御静謐の御代に住んで、町人百姓ゆたかなるにつけ、次第に世間の風俗内外ともに花麗に成たり。ちかく廿年さきを十年いぜんにくらべ見るに、万事の売買高直也。猶十年此かたの物のあがりやう、一ぱいにこえたり。それにかつて人いたまず、飢死もなし。昔は八木百匁なれば、あたらしき乞食おほかりしに、今京は百四五十匁の米を喰て、しかもいぜんよりは綺羅をやりて、いさゝか難儀の躰とは見えず。しかれば相応に商ありて、身の過らるゝ所あるゆゑ也。され共うはべよりは、内証のいたみ、殊の外つよし。」(V-2) たしかに以前より商業が盛んとなり、一応生活はできるものの実生活は決して楽なものではないが、何とか生活できているのは、「我人がちに仕末を第一として、銀まうけにゆだんなし。それゆゑよく身躰を持つと見えたり。」(V-2) 日常の生活をつましくやりくりして生活をし、金もうけに懸命につとめるからやと身代を保つことができている。このような時代であるから金もうけは決して容易ではない。とくに江戸においては、「常におもふ、江南三月の裏、鶴鶴啼所百花香しく、お江戸は地広く人多ければ、身は過易き所とばかりおもふは愚也。其代りに、諸国よりよろづの道に練磨したる、商職入りこみ、中々通例の才覚にて、及ぶ事にあらず」(II-5) という状態であり、一獲千金のぼろもうけはゆるされぬ時代となったのである。

(2) かかる時代であればこそ、金銀は一層大切となってくるのであって、本書中に金銀を重視する言葉が度々語られている。例えば「紅葉は錦といへ共、着られねば目ばかりのたのしみ、花はかをるとはむれども、飯釜の下にたかれず、とかく万事目ふるまに時を明る金銀こそ至極の詠めもの、自由自在のときは木、冬かれせず、日やけせず、昼夜四時の花ざかり、楽しのもと長命のはじめ」(V-5) である。金銀は楽しみのもと長命のはじめである。たしかに今の時世は金銀が沢山流通しているのであるが、無いところには全く無い世の中であり、「ふだん貧苦に心神をつからかし、年よりもふけて見ゆる」(VI-1) 人々が多いのに対して、良い生活をしている者は、「若々として、しかもわづらふ事なし、是人魚の汁を吸たるにもあらず、銀ののびるがおもしろく、朝夕心ゆるきゆえなり。……金銀こそ齢をのふる不老不死の仙薬」(VI-1) である。金銀こそ不老不死の妙薬であるし、「銀徳の光りほどつよきものはあらず」(V-5)。勿論人間に死が到来する時は「金銀ありても何の益なし」(V-5) であるが、しかし「人は百年のたくはへこそ、あまじけれといはずや」(V-5) である。世の人々にみとめられるのはその人が金持ちであるからと「いかに利発顔しても、手前のならぬ人のいふ事は聞ものなし、文盲にても福人のする事はよきにたつ」と金銀万能の時代である。人々はこの大切な金銀を「世界を廻りて、かならずとどまることな」(VII-5) きものと考えており、「金銀は廻り持なる」(III-2) ものであるから、「念力によって分限に成まじき物にあらず」(III-2) である。ここから町人は金銀獲得のためあらゆる努力をおし、世を渡るのである。

(3) それでは、人が金銀をかせぎ出す年齢はどうであろうか。「かならず人わかきうちは、いかやうにもくらさるものなれど、四十は老のはじめにて、五十にかゝり、めっきりと、手足のはた

らきふ自由に成て、気根よわり、物に退屈して、中々一立身せんと思ひても、心身ともにつかれて、若き人のやうには勤めがたし。かならずはたちより三十迄に、大かたにかせぎおふせて、四十よりは少身をゆるがせにして、五十にては安楽にすべき事也。いつも人は達者なるものにあらず。」(IV-1) 40歳、50歳の年齢ともなると、身心のおとろえがめだち、働きかせぐことが困難となるから、若い中に油断なく働くことが大切であるという。「これらは人のおぼえず、後悔する事なれば、若き人々の、よくよく思案有べき事なり。」(IV-1) と。「むかしより何の芸者にて、二十より三十迄に、名をとりえた人こそ、老のすゑに、銘人堪能と、天下にゆるされしそかし。四十以後まで、人にそれとしられぬ芸者は、役にたゝず。されば万事四十迄は、次第に上手に成ものにて、又四十すぎるよりは、日ごとに下手になるには、きはまつた事なり。」(IV-1) 一般にすべての稽古事、芸事は、若いうちに修練をつむ必要があるのと全く同様に、「商人も四十迄が一大事也。是迄に立身せずしては、大かた一生の肩しれたるといふもの也」(IV-1) である。若い時に努力をおしまぬようにとの教えであるが、本書では、別の個所でこれとは反対に40歳以上の場合でも致富が可能であることを述べている。勿論、条件つきであるが、「鯉井戸に立聞の相場状」に出てくる奈良の具足屋という酒屋の話がそれで、48歳の時3貫文のもとで、そこね酒を買あつめ、これをくすり灰にてなおして上酒として商売し、61歳の本封がへりの時には5,000両になったという。そこで「とかく人は心がけひとつにて、長者には成ぞかし」(IV-1) である。かゝる例にて知ることができるよう「人間の立身、若き時のみに極りたる事にもあらず五十に及んで、仕合を得るたぐひもあるぞかし。……かならず退屈なく、死るまでの立身と思ひ、我とさきを見る事有べからず」(I-2) と。

(4) 町人の立身出世一致富を願望する時、「親のゆずりをうけず、其身才覚にして、かせぎ出し」⁽²⁴⁾ 「その身一代にて」長者・分限者となるのが理想である。西鶴が日本永代蔵で述べている町人の理想は、本書の中でも原則として町人に生きている。例えば「給仕益九年廿年の奉公」(III-2) に、町人の鑑と世に光る冬木の何がしの惣領弥平次をして次のようにいわしている。「親よりの譲金を心底にのけおき、我一分に稼出して見ん」と決心して、「廿二年より心願をおこし、正道をもととし、家業の材木山を稼ぎ、其中より人をめぐみ上をうやまひ、遊楽をはぶき十露盤を枕にして、夢にも商の工夫をわすれず、終に十五年があひだに、四十万両の分限と人にさしづしられ」(III-2) るほどの成功者となり、これまた町人の鑑とあがめられた話である。しかしながら、この時世になると何の商売をするのにもも^とで(資本・元手)が必要であって、成功・不成功はも^とでにかかわる。「さても同じ世に住ながら、身袋高下の違、口をしき事かな。さらば貧家に生れて、元手なければ、いかなる商人の手だてを、もくろむといへ共、其術成がたし。とかく分を守り、己をしつて、一銭を千両に貴み、手ぢかく仕末をよくして、相応の立身を願ふべきものなり」(I-3) 元手の少ない商人は、それを大切にして一獲千金を夢みるのではなく、己を知って相応の立身を願うこととなる。そのわけは、今日では「何をか見たてゝ、口過のたねにせんと、昼夜肺肝を苦しめけれど、今の世に

五百匁や三百匁にて、いかなかな取付て、すぐに渡世のいく商売なし。」(II-5)であるからだ。しかし、商人の覚悟としては、「我今少分の元手なれども、一稼ぎはたらきしうへは、以前の^{クイソツガイ}大身袋に、立もどる事、遠きにあらず」(I-4)であり、元手が少ないといっても、本質は「くれぐれも商人の元手はたましひなり」(V-4)であるから、このことを忘れず、また失望しないで「兼好が詞を思ひ出し、商人ばかりにも、無常をおもふべからず」(I-5)金もうけのために努力すべきであると。

(5) 町人が分限者・長者になるための具体的な心の持ち方、生き方、処世術は如何なるものであるか。本書が目的としているところは、分限者・長者になるための教えを伝えるための物語の収録であるから、多種多様な処世訓を見出すことができる。いま試みにこれを二つの面において検討する。第一は、最も重要な側面であるが、町人らが日常守るべき、また日常実践すべき倫理、道徳の側面である。ただ同じ徳目をあげても、そのふくむ内容が時代相を反映して異なることは勿論であるが、とりわけ町人として積極的に致富に成功するための、また消極的には財産を失わぬ保身のための、処世訓である。第二は、直接商業行為をなすにあたり、守り、注意すべき事柄である。この時代になると、商品貨幣経済の展開のもとにおける経済活動そのものが複雑多岐になってきたのを背景として、商業活動にも複雑さが加わり、それを積極的に生きぬき成功するためには、才覚をはじめ、大変な努力を必要とする。いうまでもなく、第一・第二の両側面は、きわめて密接に結合され、第二の商業経営の具体的な実践も、最終的には第一の倫理・道徳に収斂されて、「心」のあり方、「心がまえ」の問題となってくる。以下、各々の側面について、みられる重要な点を指摘しよう。

(i) 町人の一生はまことに浮沈のはげしいものである。そこで町人は生活信条として次のごとき心がけが必要となってくる。「正直は一端の木綿商」(III-4)の中に、「人間の一生に浮沈あり。かならず怠りはあらねど、物事小手廻しになる年あり。又仕損じも上々の仕合になりて、吹つくる幸あり。爰において商人の心入有べし。よき事もつづかぬ物と思ひ、銀もうけのある時節に、仕末第一にすべし。」(III-4)そして仕合が向いてきた時は「ひとのし」のして大々的に事業をなす。ひだりまえになり万事不如意で不況の時は、心をしづめて、商売を拡大して過度にならぬよう、商に良き人を範とし、また目の前に起きた不仕合を深く案じないで、「始末よく^{ツヒエ}壁をはぶき、^{ツツガイ}身軀うちにはくらすうちには、かならず肩なほりて、仕合にむくものなり」(III-4)であり、それ故に短気をおこし、商売がえをしたり、転居したり、やたらに稼がんとあがいたりするのは埒があかないことである。「少々の事にては商人はふりをかへぬことよけれ」(III-4)。不況が深刻となり、もうけにくくなった今の時世では、後者の方がむしろ大切で、身を保つこと、じっと時の来るまで、つつましく耐えること——「堪忍」——が大切であったのである。

(a) 徳目としてまず「始末」が考えられる。儉約である。儉約により日常生活における失費をなくせば世帯はもちなおるもので、これで成功した例と、捨てられかえりみられぬものをただで集めて、それを売捌き金をもうけて成功した例とをあげているが、どちらとも「心」の持ち方であり、

それを「実行」するところに効果がある徳目が始末・儉約である。前者の例として、「松は常盤色あげぬ^{ツツガイ}裕羽織」(IV-3)の中に、「世帯の仕末は成ほど有べき事也、くれぐれも気をつくべし。」商人の台所ほど無駄な出費のあるところはない。「日南に氷貧乏」である。炭・薪・紙一枚に至るまで大切にす。「覚悟だにくづれねば、ながく貧乏はせぬもの也」。武士の格式をまねて、町人の身軀の格式に即して日常の生活を送るによって儉約し、成功した例である。後者の例として、「千貫目持の印判おして深き心」(I-5)の中の市助の話がある。市助は大多の御用金をあつかう大商人の河合又七の富貴なるをみて、大津より薪を背い、毎日京に売りに来る。「皆金銀にてなる事、人は精次第なり」と発奮する。ある時大店にて下男が燭台挑燈を掃除している時、そこに流れついている蠟をもらいうけて、またほごの奉書をもらってつつみ、前者は良品であったため高くうれ、奉書は皺をのぼして利用した。「藁一すぢにても、沢山にすべき事にあらず、猶万事に心をつけて油断なくはたらき」(I-5)世の商人の手本となったという。

(b) 次に「分相応に」ということを重視する。

儉約をする場合、「分相応を怠れば^{ツツガイ}壁多し」(IV-4)であって、それぞれ格式に応じての儉約をすすめていると同様に、仕事をする時も、あまり高望みをせず、「分際相応の稼ぎ、それを勤めず、油断して徒に日をつひやし、無益に夜を深かず、さりとは不覚悟千万也」(I-1)。土農工商共に、出世立身のはじめをみると、「いささかの事をたねにして、功をつみ^{ツツガイ}勞をなし」たところにある。本書開巻第一話「白銀百枚歳暮の御祝儀」の冒頭に「分際相応」の稼ぎをすることが大切であると強調していることは時代のうつりかわりを知らされて興味深い。

(c) すべて町人は商売上は勿論日常生活における根本的な心として、「律義」「正直」「直なる心」を大切にし、重視していることは、逆に「不正」を嫌む心である。不正をしてえた富は必ず消え去り、貧しさは以前よりまし、報いは必ずあるものと信じていた。「六十余州紙の来歴男」(II-1)の話は大坂に河内屋善兵衛という商人あり、その末子の善兵衛は猿智恵で前後そろはぬ分別を自慢にし、まことに「いやな商人」とうわさされてるのも知らず、得意先をしくじり、親よりゆずられた財産を失った。のちに手代として住みこめば、その主人をたおす工夫をして、ついに発覚して店を追出されるという有様で「さりとはかゝる不覚人、世にためしなき身袋の潰やうかな」(II-1)とある。この悪人が、駿河屋久左衛門という男と無二の友人である。久左衛門は今は一両の分限者となっているが悪人で、そのはじめ銀座より金を借りて商売をしたが、その時借金の仲介をとってくれたのが手代の四郎右衛門と太兵衛の二人であった。この二人がつまらぬことが因で相互に争い、一方が他を切殺し、そのため他方は自害して二人ともこの世を去る。久左衛門は仲介者となり貸してくれた二人が死んでしまった今、証人もなし、借金を返さずに、かくてえた元手で商売して成功した男である。二人の悪人が互いに親しくなり「人にはあひくちもあるものかな」と世間の人々がうわさするほどであった。善兵衛はついに久左衛門の信頼をうらざり、久左衛門女房と不義の密

通をし、久左衛門に毒をのませて殺害する。「思えば久左衛門みちならぬ金銀をかすめ、今分際の名をとるといへ共、因果のめぐる所おそろしやかなしや」(II-1)で、久左衛門は死に果て、そのうえ財産も女房もうばわれた。善兵衛は久左衛門死後店をのっとり、「後家と馴合て、世に有まじき仕方」で商売をつづけたが、失敗をかさね、すべてを売り払ってかろうじて商売をしていたが「天道罪をゆるし給はず」で、ついに善兵衛は盲目となり、女房に手を引かれて乞食となる。まさに「たゞ実体ならぬ金銀にて、富めるはあやうし」であったのであり、「律義を守り、正直をもとゝすべし」が世渡りとして正しいのであって、「これはよき人のいましめぞかし」であるという。また「仏の箔を削る頓欲の匏」(II-2)の中に語られる材木柯枝の桔梗屋は「商の相手おほく、請負普請に手ぬきせず、律義なる名をとつて」立身出世し分限者となった者である。桔梗屋の人柄は「第一老母に孝行をつくし、家来にいたはりふかく、他に偽りをいはず、仏神の事をもおろそかにせず、人の人たる人と、広き所にてさたあるぞかし」(II-2)であって成功するのは当然であった。これと正反対に、造り大工がおり、洛東の真如堂の建築を請負いをするが、手ぬきの仕事をして寺僧諸且那をだまし、建築が終了したあと30日もたたぬうちに柱がゆがみ、軒桁が落ちる有様、「浅ましくも頓欲邪にして、是ほど仏縁にはつれ、万人の氣相にたがふ、其罪いちじるしく」(II-2)で、それまで病氣一つしない男が若いのについに腰ぬけとなり耻をあらわす有様となった。かくて、「いかに慈悲惠元の仏なればとて、是ほどの事なうてはと、あはれむ人はあへてなかりき」(II-2)と。これらの話以外にも幾つかの物語があり、「ひすらこぎ人の出世立身したるためしなし。商人は随分手全く律義にすべし」(III-3)と教える「二包の古銀は袴大黒」(III-3)の物語や、あるいは「人上の貧福、皆前世の果によるといへり。され共当来にて、直なる心をもつて、他にまじはり、平生油断なき時は、天道是をめぐみ給はで有べきや」(I-2)の教訓を示さんとする「五文取の餅一口の鬼味噌屋」(I-2)の話など、枚挙にいとまがない。このように「律義」「正直」が最も重要な徳目として考えられているところに注目したいと思う。

(d) この他に、勤労、商売に精を出すことを教える具体的な日常生活としての「朝起」がある。「朝ねは福の神のお嫌ひ」であり、「人は念願を起し、朝起して堪忍をたもち、始末を能くすべし、物をかんがへぬれば、大なり小なり徳を見出すもの」として分限者となりうる。「二年めの露の花只工夫たね」(I-4)の話は、朝ねのくせ(夜おそく泉南の不夜城で夜遊びにつかれることの結果として)が嵩じることで身袋がもたないと急に分別極めたところに、朝がほの種子から生えた花に心をうばわれて、それを見るため毎日早起きとなり、いつしか癖の朝ねを忘れるようになって勤勉に働き、以前よりまして大身袋となった鋤屋の物語がある。

以上やや未整理のままであるが、本書の中で重要であると指摘できる徳目について述べたのであるが、これは著者の主張であると共に、当時の町人が納得し、守らんとした徳目であったことも事実で、彼らが共鳴しうるものであった。おわりに、町人のつつしむべきものとして列挙した項目は

次のごときものである。

「第一商人の慎むべきは、短気朝寝、色狂料理ごのみ、小諷三味線、博奕武芸、長居大酒分列立、人言泣言、僭上仕末咄、夜あるき目利たて、芸自慢無礼、馬鹿愚癡芝居好、寺参り友だち付合拍はやし、これらをまづ無用たるべし。扱すべき事は、朝起夜詰、薄着小学文、算用帳合、此外はせずとくるしかるまじ。」(VI-5)

(ii) 商人が分限者・長者となるため、商売上で注意すべき諸点をみると、

(a) まず第一に家業を大切にし、それにつくことをすすめる。「片時も家業に油断する事なかれ」(III-2)「人は精を出し、器量をみがき、家につたはりたる商職を、たまかにつとめて立身すべし」(V-5)と。また少し意味をひろげて、「かならずあしもとによい商のある事を知ずと、福の神の仰せを人間油断の耳に入らざる事のぜひもなや」(IV-2)と、あしもとによい商のある事を知りて、他に目を移さず精を出すところに福の神はかならずやどるものである。

(b) 実際には商売はきわめてやりにくい時世となっている。前にも引用したが「常におもふ、江南三月の裏、鶴嶋啼所百花香しく、お江戸は地広く人多ければ、身は過易き所とばかりおもふは愚也。其代りに、諸国よりよろづの道に練磨したる、商職入りこみ、中に通例の才覚にて、及ぶ事にあらず」(II-5)である。通例の才覚ではなかなか商売で成功致富することはむずかしい世である。またわずかな元手でうまくできる商売はそう沢山あるわけでもない。しかし商人は決して無常を思い、悲観してはならない。金銀をもうける「才覚」をなすべきである。知恵才覚を働かして成功した例もまた本書で数多く取扱われているが、「内儀の笑貌は廿五間口の家」(II-3)の中に「亭才覚ものにて」「諸事一人に一役づゝわたして」すなわち「分業」を取り入れて成功した例をあげている。商売をする上で経営を分業化し、合理的に行わんとする意図は重視されて良いと思う。その上、毎日の相場の動きに敏感である事、「商人は何によらず、毎日相場を聞て、手帳にも附置、心だまに忘れまじき事也」(II-3)である。また商取引の仕方として、「何にても下直なる物は買込て、いつ迄も相場のあるまでは売ず」という方法をすすめているが、これは何人でもできることではなく、誰にもまねられることではない。

(c) 「給仕盆丸年廿年の奉公」(III-2)の中にある物語は、当時の商人のあり方、理想とする行為を理解するうえに興味あるものである。「聞て心ちよき物、番匠ののみ音、餅突音、天秤の音、是ぞ世の楽しみの基」で直接に働きて稼ぎ出すことこそ根本である。さて、商売をして人をやとうこともできず、小さい商ですごすのはまことに口おいしいことであると、「惣じて三人口迄を身過とはいはず、五人より世をわたるといふといへり」。下人一人もつかうことができず、旦那様といってくる人もなく、女房のつくった飯で腹ふくるゝと思うような生活を本望と考えるのは商人として腑甲斐ないことであって、「商人の出世といふはさにあらず、ずるぶん商を仕広、手代あまためしづかひ、我家名をゆづり、身軀を仕分るこそ誠なれ」(III-2)である。商売を手広く行い、多くの人々

に職を与えることで、生活をつづけさせてやり、やがて彼らに暖簾をわけて独立させてやるのが商人のいづく理想となる。また、商人の生き方として巨額の金銭を持っていたとしても、それで「歩廻しのよき家をもとめ、かし銀の利をとりて暮す覚悟の人には、あたら金銀の持せおおくは、世の墜ぞかし。いはゞ金銀の徳うすくなり、友過の世界にはづるゝくせもの、商人の風うへにもおくまじ」(III-2)。持てる金銀で家作をつくって家賃をとったり、金貸しをして利子を取ったりする人々に金銀を持たしておくのは「世の墜」となるという認識は、金持が金銀をただ貸して金銀を獲得できれば良いというのではなく、商売をし、多くの人々に職を与え、生活をゆたかにするような仕事に向け金銀を活用する時はじめて商人が商人として、本来の意義をもつにいたるとの考え方である。このように金銀を利用し、多くの人々に職を与えるやり方をする商人を理想的商人とし、これに反し何の商売もせず、家賃、地代、利子を懐手しつつ獲得する人々は「商人の風上におけぬ者」とであると軽蔑するのである。かかる考え方は十分注意してよい。これと同様な生き方をした話として「地獄の釜の蓋曙染の羽織」(I-3)の中に、武蔵国の紀惣という大商人の粹に関する物語をのせている。紀惣は子供を京へ修行に出す。その場所が「小家軒をならべ、扇のはねをけづり、けふの手間賃を、あすのけぶりの俵にして、正真のたゞきやめば、喰やむとは爰の事ぞかし、……」(I-3)という洛外の貧しい人々の住む一角であった。その町の名主の粹は18歳にて大なる好色もので、「町人の身として過分の侈者也」であり、紀惣の粹はこれを見て反省し、「金銀の大切なる事」をおぼえ、やがて江戸にもどり材木屋をつぎ、儉約し、働き、分限者となった。さてこの紀惣は、「新田をひらき、諸国の作だふれの百姓をまねき、是に鋤鋤の農具を、賃をとって借、荒島をうたせ、それぞれに人をすくひ、其身にもくまぬ金銀をもうけ、長者の名をとりし也」(I-3)。粹は金銀を貸して利子をとることをしないで、金銀を働かせる場を、諸国の土地より離れざるをえなかった百姓を集め、農具を貸与し、荒島を耕作させることに見出した。それぞれ人をすくうという意味は、職を失った農民に職を与え、生活ができるように金銀を使用することに高い意義を見出し、評価している。かくてこのようにしてえられた金銀は「其身にもくまぬ金銀」であると思ひ、致富に成功して長者となった。当時はまさに町人による新田畑開発、請負耕作、小作の展開の時期であったことと見えあわせた時興味ある商人の生き方である。金が金を産むだけで豊かに生活をつづける商人が多くなりつつあることを心よく思わなかったのである。

(d) さて、以上のように多くの人をつかう時、別の問題が生じてくる。とくに商人の場合、手代に十分注意する必要がある。「鯛は戎の脇指鋤際ツバサの商」(IV-4)の中で「奉公人などをたのみにすべからず、今時の手代などは、小宿をめぐりめぐりにこしらへ、すはといふ時の覚悟のみして、主を思ふものは希也、それゆゑ皆天罰のがれがたし」と言わしている。奉公人、手代はきわめて大切であるが、悪い人も多く、良い人をうることは困難である。また「小糠三合の冥加は十万両」(V-3)の中で今の手代の身持を物語り、注意を喚起している。「今の世の手代の身持ほど、うたてけきはなし。

いぜんにかはり、私商ワラツツアキタイを陰にてしかけ、しかも分不相成金銀の取組み、しおふすれば己が徳として、損がゆけば親方へ難儀をふりかけ、揚句には欠落して、身の落着を見せず」(V-3)という悪人ぶりである。この原因はどこにあるかとみると、「皆好色よりおこる私商なり。」傾城あそびではなく、下卑た白人あそびであり、その遊びは何のほりもいきもなく、しかも高くつくものである。この好色の味を知った手代は、何とかして金の工夫をしなければならぬため、主人をごまかすこととなる。まことに「かやうの人屑を我手の代と思ひ、たのみにしてつかふ親かたこそあわれなれ」(V-3)である。それ故に、奉公人、手代は人を選らばねばならないのである。

(e) 商売を行う上で、取引先や同僚にだまされぬように注意することもまた大切である。「二包の古銀は袴大黒」(III-3)の物語の中に泉州界に敦賀屋の何がしという商人がいたが、酒姫を楽しむ有様で身軀が傾いてしまった。ここに天王寺綿屋町に出雲屋という木綿問屋がいた。多くの人々が知らずにこの敦賀屋に多量の金を貸していたが、ついにこげつきて全く返金もなく大損失をしてしまった。その中でこの出雲屋だけは、「敦賀屋の身軀潰るゝ所を見極め」て予め貸金を取りもどしてしまって少しの損失もなかったという。そこで何を根拠に身軀がつぶれることをあらかじめ知りえたのかと問われた時に、敦賀屋のやることすべての行動が全く見せかけであったのを見破ったという。具体的にどのように見せかけたかは省略するが、彼が巨万の財産を持っているようだます行動を次々と見破ったのであるという。まことに、この様に人をだます行為は「手をさし出してするぬす人にもまさりし人心、油断有べからず」(III-3)である。商業に従事する人々にかかる取引先の行動には十分注意を払わねばならない。

(f) また商売の仕方がちがってきたことが「身柱もとに千貫目の埃」(III-5)の中に述べられている。日本永代蔵「昔は掛算今は当座銀」⁽²⁵⁾の中で、西鶴は三井呉服店が現金売をして信用をはくし長者となった物語を述べ、現金売が掛売にかわって商売のやり方となったことで大成功したことを指摘している。その頃に比して、商売は一層むずかしくなった当世である。「当代至極むづかしきは、商の取つきなり。心狭くして懸商をせず、現銀にのみ売んといへば、皆敷得意なく、のちには商しまふより外なし。又いかに商があればとて、掛さきとどこほりては、利元も人にとられて、むねんや身袋を潰す事」(III-5)になりかねない世である。そこで、掛売をする場合には「人の身軀をよくよく見たつべし」であり、掛金を上手に取る工夫をしなければならない。また、「中々通例の事にては、商を人にしおとされて、埒の明かぬ」(II-1)世であるから、商売をする時、元直(仕入値)をまず買手に知らせて、「やうやうさき様のれうけんにて、先方ので承を取りつけて、相応の働貨ハネラキツをもらうようにすればよい。かつては思い外のもうけがあったが今はそれもなく、手がたく商売をすることで得意先の信用をえ、あまり利巧だてをしないで、商売をしていれば、必ず「身上をもつ事かたし」である。こゝでの要点は、無茶な、法外なもうけを得るため値をつりあげての商売をいましめ、長く得意先の信用をうる仕方での商売をすすめているのである。

4.

以上、要点を十分つくしえないが商人が富を獲得し、分限者・長者になる道すじと、倒産し乞食と化する道すじとを、本書の叙述に即して検討してみたのである。商人としての理想の姿を「自分に一器量、奉公をつとめて、家禄を申うくるこそ、出世とはいははめ。まして町人は親のゆづりを、ぬくぬくと懐手してもらひ、生れながらの分限者といはるゝは、さのみねがはしからず。何とぞ身一代に稼出して、そのさかえを子孫にのこす人こそ、有がたく目出たけれ。」(V-1)とえがきだしている。身一代にて稼き出し、それを子孫に残して行く人こそ商人の理想、町人の鑑であるという。また「身一代に金銀を仕出来し、家門のいらかをみがき、手代いくたりかしつけ、手下の小商人を取たてし数しれず、かゝる人こそ、商人の守ほんぞんともいわめ」(V-1)としてむさしにかくれなき石打何がしをあげて物語る「千人前の居風呂桶」(V-1)がある。ここでは身一代にてかせぐ外に、すでにみたごとく手代を養育し、自分の配下の小商人を世話することを一つの条件として商人の鑑と考えている。商人がこのような態度を根本にすえ、日常生活を厳にし、商売上においても律義に才覚をはたらし勤勉に努力している上には、必ず「天・神・仏」の加護があって、仕合せになるという信念=信仰が存在していたことに注目したい。一時は仕合せでなくとも、商人がまことの商人らしく(直なる心、律義にて行動する)商売をつづけて行く限りは、必ず「天道是をめぐみ給はて有べきや」、「天道人氣に空しからず」、「天道物いひ、地形事を聞けり」、「天しり地しり、人しらずといふ事なし」、そして「仏神感応あって、幸をくだし給ふ也」という結果がやってくる。彼らは信仰していた「天・神・仏」の教義や内容について明白な理解を持っていたとは思えないし、当時流行していた民間の信仰をもあわせて、希望を「天・神・仏」の加護に托していた。かかる信仰=信念が商人を商人らしき精神で実践にかりたてたと考えられる。かかる信仰=信念は、これとは正反対に、もし道ならぬ金銀をもうけたり、不正を働き、世に有まじき仕方分限者・長者に一時なったとしても、その結末は必ず破滅するという信仰=信念として強く作用している。すでに述べた「六十余州紙の来歴男」(II-1)中の久左衛門・善兵衛の結末がそれを物語っている。「久左衛門みちならぬ金銀をかすめ、今實際の名をとるといへ共、因果のめぐる所おそろしやかなしや」、「たゞ実体ならぬ金銀にて、富めるはあやふし」、「天道罪をゆるし給はず」と言い両者ともに倒産し悲惨の最後をとげている。また西鶴の「日本永代蔵」の「世は抜取の観音の眼」に類似の物語である「銭の穴より天道の恵」(VI-5)では仏具を商う佐内が悪い仕方分限者で金銀を獲得したものの、「此事かつてせけん知ざりしに、佐内が積悪、天道も今はゆるし給はぬ時いたりてや」、気が狂いみじめな最後をとげるに至っている。それは「人をたらし、本意にあらぬ銀まうけ、いかでつづくべきはずなし」である。

終りに、「百人一首を八十八の手習」(IV-5)の物語中に述べている事項について考えたい。「商は互に相對のうへなれば、百倍の利分を取たるとても、是を科とはいはず。ただ邪に人を謀、職人は直段の外に手ぬきして、商人はすりかへて手本より、悪敷ものをつきまぜるなど、さりとは有まじき事也」(IV-5)の認識である。商行為は互いに相對で行う行為であり、両者が合意の上で取引値を決定し、両者ともにその値で取引することで満足するようになるならば、百倍の利分(利益)をうることがあってもこれを科(罪・あやまち)とはいわず、正当な利益であるという。こう言いきるには職人は手ぬきして粗悪品を製作したり、商人が見本と異なる劣悪品を良品にまぜて送るなどの「不正」な行為が無い場合に限るのである。すでにみたごとく「正直」「律義」「直なる心」等の徳目が生かされ、それを土台として行なわれる商行為とそれによって生ずる利益の是認は、まさににくからぬ仕方での商行為の要求である。逆ににくき仕方の商行為の拒否である。かくて、一つの条件が与えられる時積極的に商行為と、それから生ずる利益が是認されるのである。ただ注意すべきは、商行為や利益が是認されたとしても、そこから直ちにこれらのもつ社会的経済的意義について、梅岩が主張したごとく、徹底的な反省や検討が生れてきたことを意味するものではない。商行為や利益の是認は、分限者・長者となることへの教訓の意味を持っていたにすぎないと考えられるであろう。しかしここに梅岩が商業行為、商人道、利潤についての積極的な主張をする以前における一つのめばえを見出しうるであろう。本書は全体を総括して次のようにいう。「いかにも金銀はまうけがたしといへ共、あまり無道のふるまひはせぬ事也。……出生あしき金銀にて榮たる人は、いまだ聞ず。とかく身をはたらし、心をたまかに、世の仁義を守り、仏をたつとみ、神をまつり、其中より立身すべし。さなくては二代つゞかず。一代もあやうしあやうし。」(IV-5)かくて分限者となり長者となった人々の成功の秘密をみるに最終的には「心」の問題にきせられ、「商人の元手はたましい」であり、そして「心のあらたまる所へ、福の神や宿り給う」と。

× × ×

団水の「日本新永代蔵」(正徳3年)が出板された前年には、江島其磧の筆になる「商人軍配団」(正徳2年)および「渡世商軍談」(正徳3年)が出板されたことはすべて述べた。これらはともにいわゆる町人ものの系列に属する草子で、町人の家職に対する心得・処世訓となるべき物語を収録したものである。申すまでもなく、著者江島其磧は浮世草子の発展からかんがえる時、重要な役割を演じた作者であった。近世文学史の示すところからみると、京都の麩屋町通哲願寺下ルに八文字屋八左衛門という書肆があり、この書店は古くから浄瑠璃の正本等を板行していたものであったが、二代目安藤八左衛門の代になると急速に店勢を拡張した。八左衛門は二代目自笑と号し、文才、商才を兼ねた経営者であり、当時の庶民の好みをたくみに把握し、評判記にすぐれたものを出し成功した。前述の其磧は八文字屋本の専属の作家として、筆を振っており、八文字屋自笑の名で刊行

された草子類の眞の作者が其磧であった。評判が高まるにつれて自笑と其磧との間に不和が生じ、争いとなった。一時両者別々に草子類を出板し相争ったのであるが、その不利なることを悟り、両者は相和解し、以後自笑と其磧の連名にて草子を出板して行った。八文字屋本は、西鶴流の浮世草子から、いわゆる「氣質・容気・片気・形気」ものの新趣向を出して成功し、多くの人々によまれるところとなった。其磧の氣質物として最初に世に問うたのは、「寛濶役者片気」(正徳2年)であり、「世間子息氣質」(正徳5年)、「世間娘氣質」(正徳5年)、「浮世親仁形気」(享保5年)等をはじめ、町人にかかわるもののみも列挙しても、「諸商人世帯氣質」(享保21年)、「世間長者氣質」(宝暦4年)、「寛濶大尺氣質」(享保3年)、「渡世勘弁世間手代氣質」(享保15年)、「禍福廻持当世銀持氣質」等がある。いま紙数の関係で、前述の商人軍配団・渡世商軍談をはじめ、氣質ものについては他日にゆずりたいと思う。

(1) 浮世についての解説は山口剛氏の「浮世草子集」(日本名著全集江戸芸文部第9巻)の解説がまことに明解である。浮世は多様な意味を持つ言葉である。浮世は当世の義であり、現代の語があてはまり、今様の意である。貞享・元禄の頃において、浮世とはすなわち「当世」であり、浮世草子は当世の世相を写實的に取扱った小説である。古くより「憂世」の言葉があり、憂世は人の世のはかなさ、苦しさ、つらさの厭世的意味、それから転じて現在の世の中、現実の人生の意味をもった。また「憂世」は「浮世」であり、浮世袋(遊女屋の暖簾の縫留に用う)より転じて「浮世狂ひ」となり、「遊女に戯れる」(女にたわむれ、若衆にたわむれる)と解される浮世である。これから狭義の意味で、浮世とは「好色」であり、浮世草子とは好色草子である。好色本、色草子、浮世本であり、さらに広義に「好色以外の当世の社会生活を写実する小説」類をふくみ、それは好色ものをはじめ、武家もの、町人もの、さらに「氣質」ものに及んでいる。

(2) 西鶴は浮世草子として、(1)好色ものとして、「好色一代男」(天和2年刊)、「諸艶大鑑」(別名好色二代男)(貞享元年刊)、「好色五人女」(別名「当世女客気」)(貞享3年刊)、「好色一代女」(同年刊) (2)武家ものとして、「男色大鑑」(別名「本朝若風俗」)(貞享4年刊)、「武道伝来記」(貞享4年刊)、「武家義理物語」(元禄元年刊) (3)町人ものとして、「日本永代蔵」(別名「大福新長者教」)(元禄元年刊)、「世間胸算用」(元禄5年刊)、「西鶴織留」(元禄7年刊)外に雑を出版している。

(3) 浮世草子についての以下の叙述は、広末保、森山重雄氏の二著をはじめ、山口剛氏「江戸文学研究」、近藤忠義「近世小説」、重友毅「日本近世文学・展望と考察」、守隨憲治「国文学史」、相磯貞三「近世小説史・上方篇、江戸篇」等を参考としつつ行われた。また浮世草子は日本古典文学体系中の「西鶴集」上・下、「浮世草子集」帝国文庫、日本名著全集中に所収の翻刻本を主として利用した。

(4) 町人ものの系統に属するものとして、その一例をあげれば、唯楽軒「世界万宝立身大福帳」(元禄16年)、月尋堂「子孫大黒柱」(宝永6年)、団水「日本新永代蔵——今世長者鑑——」(正徳3年)および其磧「商人軍配団」(正徳2年)、同「渡世商軍談」(正徳3年)。

(5) 教訓を主として書かれた草子の一例として、都の錦「沖津白波」(元禄15年)、団水「昼夜用心記」(宝永4年)、北京散人「儼偶用心記」(正徳3年)。

(6) 八文字屋本中とくに氣質物の主たる作品は、帝国文庫第30編「氣質全集」および同第40編「統氣質全集」に収められている。また江島其磧の作品は同じく帝国文庫第27集、同第28集「其磧自笑傑作集」に収められている。

(7) 近世(徳川)期庶民文学は、中世文学を成立させた世界と異って、商品・貨幣経済のいちじるしい展開・商業資本の発展と、身分制度の確立とのかかわりあいで見えてくる「近世都市」の成立や「近世町人」の活動を軸として形成されてくる。商業資本の発展が人間と自然とのかかわりを変革し、人

間相互の関係をつくりかえ、中世になかった新しい人間像がつくりあげられる。それが近世庶民文学の性格を規定することとなる。近世庶民文学の形成と発展(芭蕉・西鶴・近松に代表される文学)は当然近世社会の構造とその歴史的特質に根本的に規定されていることは疑うべきもないが、ここから文学のもつ特殊性が軽視されて、文学をその時代の社会や経済の歴史の中に解消し、社会や経済の特質より一方的に文学の特質を把握せんとする研究がなされてきた。ある点では一面の眞理を持ちつつも十分反省すべき点を持っている。この場合、社会や経済の歴史的性格をどのように理解するかに従って、文学の評価は、いちじるしく相違してくる。戦前・戦後を通じてわが国の封建性を清掃することはきわめて重要な課題であった。そこから封建性の残存とその役割を認識し、その批判なり、警戒なり、解体なりが重視される結果、近世社会の歴史の構造と発展の特質、そこにあらわれてくる文化的諸現象の中に、前近代的=封建的性格を指摘することが急となり、文学や思想を前近代的=封建的性格として規定することとなったのである。これに対して、対照的に、近世社会を把握する時に、そこに近代的要素の萌芽を見出しうるとし、その存在を積極的に評価せんとする研究がすすめられている。近世社会における商品・貨幣経済の展開、農村構造の特質、とくに近世都市・近世町人の進歩性を過大に評価し、商業資本が持つ「進歩性」を強調し、時としていちじるしく誇張的に強調される場合が生じてくる。かかる立場からは近世町人の思想やこの時期に成立した文学にゆたかな近代性を見出し、明治維新へと結合せんとする見解なのである。さて、この小論で対象としている町人倫理の評価に関しても今日まで原則的には上の二つの立場からする評価が入り混っている。

上の点に関連して、庶民文学について研究上の反省と問題を提起した点において注目すべき研究として、広末保「元禄文学研究」と森山重雄「封建庶民文学の研究」の2冊があることを記しておく。

西鶴の町人ものにみられる経済倫理について多くの研究があるが、とりあえず、高尾一彦著「近世の庶民文化」は有効である。また近松の町人倫理の研究として、中田昌直「近松と町人の世界——町人倫理の問題を中心に——」(国語と国文学・昭和30年1月号)が注目され、中田氏の主張に対しきびしい批判を展開された広末保「元禄文学研究」と、積極的な評価を与えられた森山重雄「封建庶民文学の研究」があることを指摘するにとどめる。

(8) 私がこの小論にて西鶴以降の浮世草子の中町人ものに属すると考えられる若干の草子を対象として、西鶴・近松の作品の中に展開される町人の倫理についての研究と、梅岩の心学の研究との中間を検討してみようとするに至ったのは、知人の早稲田大学浅香勝輔氏と若干の討論をなし、また最近浅香氏が発表された「町衆の経済思想」(「日本史の諸相」福村出版所取論文)に刺戟をうけている。氏の論文は、主として町衆の経済思想を検討するところに目標があるが、まず経済思想を吉田兼好「徒然草」中にみられる致富論より筆をおこし、「有徳人・徳人・長者」の形成、貨幣経済の発展と経済現象への関心を検討し、室町期以降いわゆる「町衆」の歴史的形成と、御伽草紙の中に散見する経済思想を考察する。さらに閑吟集、狂言歌謡、降達小歌集等に散見される経済思想を検討したあとで、江戸初期の仮名草子に目をうつし、とくに塵劫記、長者教等に注目し、長者教について詳細なる検討を加えている。長者教(寛永4年・1627)にみられる経済倫理については、西鶴の「日本永代蔵」との関連において土屋喬雄氏をはじめ研究は決して少なくない。浅香氏は比較的多くの筆をこれについてやしている。仮名草子より浮世草子への道をたどり、西鶴の町人物、とくに「日本永代蔵」の検討に及んでいる。かくて「御伽草子から小歌・仮名草子をへて浮世草子に至る経済思想の一端である致富論の提示を試みつつ、町衆の側面」を述べて成功している。

(9)(10)(11) 石田梅岩「都鄙問答」岩波文庫版にふせられている柴田実氏の解題、文庫本136頁。

(12) 元禄11年の書籍目録によると「好色五人女」の5冊本が銀3匁、「好色一代男」「武道伝来記」8冊本で銀5匁であるという。元禄11年の米価を御切米百匁40両、一石が約60匁とする。現在一石を概算2万円とすると、銀1匁が330円となる。すると5冊本で約1000円、8冊本で1500円となる。買いうる人は金があり、教養のある人であり、中流以上の上層町人が購買者となる。

(13) 「浮世草子集」解説、39頁。

- (4) 「長者教」より「日本永代蔵」への展開について、その経済倫理乃至は経済理念の展開の面、土屋喬雄著「日本経営理念史」の指摘がある。浅香氏の掲書参照。
- (5) 都の錦については、山口剛氏の「浮世草子集」の解説に、都の錦がわが国にて詳細に紹介されるに至った経緯と人となりなどが説明されている。それによれば、都の錦は実戸光風、後に名を鉄州と改む、伊藤仁斎、北村季吟、烏丸資慶について和漢の学を習い、月波和尚について参禅したこともある。彼は遊蕩のため勘当され、生活のために浮世草子の筆を執った(文集76頁)。
- (6) 「沖津白波」刊行の4年後に、教訓性の強い浮世草子の系列に入るものとして、北条団水の「昼夜用心記」(宝永4年)や月尋堂の「儼偶用心記」(宝永6年)が板行されている。儼偶昼夜用心記や儼偶用心記と沖津白波との比較考証は山口剛氏により行なわれて明白であるが、昼夜用心記はかたりの手段を当時見聞したものを収録することにより伝え、人々の注意をうながしたもので、昔の物語も今の事実談として記録し、その奥に教訓性を伝えんとするものであるが、教訓性は比較的軽く扱われている。ここでは当時町人が生命がけて蓄積した財宝を、奸智に長けた者にあざむかれて失うという悲運に泣かぬ様に警戒した書である。広義の町人もの一種である。
- (7) 本書には儒書から漢文のまま引用されている場合が多く見出される。この小論に原文を引用することを止めて、一応読下し文に改めて引用することとした。繁雑となるので原文をあげない。
- (8) 「沖津白波」の本文を引用する時、引用文がやや多いところから、それぞれ頁数を示すことを選び、第何巻、第何番目の話であるということを示すにとどめることとする。例えば、沖津白波第5巻の第1番目の話として「丹波の庄屋一古田孫兵衛が事、書物やと回答する事」の中の引用文については、(V-1)という風に記しておく。以下同様である。これは小論が直接対象として論じている書物の場合にかぎり、一般の引用はそれぞれ頁数を記す通例に従う。
- (9) 北条団水は鳳城団水であり、団水は団粹とも書いた。橋堂又は平文字と号した。白眼居士という、一条堀川の人で、後に難波に下り、西鶴のあとに住み「西鶴菴」と改めた。俳諧と戯作の西鶴に仕えて志が篤く、俳諧を学び、「団袋」その他の俳書があり、後浮世草子に力を注いだ。「置土産」以下西鶴の遺稿の整理につとめ、世に公にした。西鶴の追従であり模倣であった。宝永8年正月4日没、行年49歳。山口剛氏の解説による。
- (10) 相磯貞三著「近世小説史・江戸篇」28頁。
- (11) 「浮世草子集」山口氏解説、83頁。
- (12) 山口剛氏が前掲の解説において日本永代蔵の巻3「世はぬき取の観音の眼」と本書の巻6「銭の穴より天道の恵」と対比して類似を説明しているのを見よ。致富と倒産・没落との間の因果関係を西鶴はあまり露骨にはあらわさない。しかし団水は因果関係を強く主張し、そのことにさらに長々と教訓を加えている。「……かかるためしを聞に、……心をひるがへし正路に身を過終へよ、さりどて因果のめぐりきたる事、遠きにあらず、……とかく人は運によつて榮え、又はもつれたる事もあるものなり、かならずよこしまにて身を過金銀をためんとする人は、鉦屋佐内が因果物がたりきゝたしなみたまへ。出家をおとする其罪はおびたゞしき事ぞや。くれぐれうかべる雲の金銀、きえやすき淡の世わたり、かならずよこしまの道をして、一端利をうるといへども、つひには天道の恵にはずるゝ事、むかしよりおほしとかや、これらも人をたらし、本意にあらぬ銀まうけ、いかでつゞくべきはずはなし」と。
- (13) 「日本新永代蔵」の本文を引用する場合、沖津白波を引用した場合と同様に、例えば巻1第1話「白銀百枚歳暮の御祝儀一大坂にかくれなき大仏分限、泉州界の銀親子の代は小の晦日」の中の文章を引用した時は、頁数を示さず、(I-1)とのみ記すこととする。
- (14) 西鶴「日本永代蔵」(岩波文庫版・17頁)。
- (15) 西鶴「日本永代蔵」(岩波文庫版・31頁以下)。

(経済学部教授)

『文明論之概略』にいたる 「風俗」の思想について

—丸山思想史学の批判的再評価—

田 中 明

目 次

- 第一章 思想史的研究の理論的諸問題
 - I 「一般的結論」
 - II 理論的諸前提の批判的再検討
 - III 「日本の思想」と対象の特質
 - IV 丸山思想史学の方法論的陥穽
- 第二章 「風俗」の思想の機能と構造
 - I 理論的前提
 - II 「政治風俗」概念の成立
 - III 「人心風俗」思想の展開
 - IV 丸山思想史学の批判的再検討

第一章 思想史的研究の理論的諸問題

I 「一般的結論」

『経済学批判・序言』はマルクスの土台・上部構造論を総括するものと看做されている⁽¹⁾。その点の検討を後段に委ねて、ひとまず『批判』の「序言」によれば、マルクスがヘーゲルの法哲学・国家論の批判を経て到達し得た結論は次の二点に在るものとせられた⁽²⁾。すなわち、〔一〕法的諸関係も国家諸形態も物質的な生活の諸関係に根差し、〔二〕後者の諸関係の総体よりなる「市民社会」の解剖は経済学の課題をなすが、第二の観点は、マルクスをヘーゲルの法哲学批判より転じて『経済学批判』へと赴かせ、かくして「準備作」の多くを越えて『資本論』にいたる、経済学研究のための「導きの糸」をなした「一般的結論」は「序言」において早くも端的に下記の如くに要約せられた⁽³⁾。それによれば、〔I〕人間の物質的な生活の社会的生産の様式が、政治的、精神的、生活過程

注(1) 山之内靖『社会科学の方法と人間学』9頁参照。『人間学』の第一章は「序言」理解の筆者と相異なる社会「科学」の方法の一例というべきであろう。

(2) K. Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Vorwort, in: Marx Engels Werke, Bd. XIII, (Berlin, 1961), S. 8.

(3) Ibid., S. 8-9.